

明治期社会主義者の基督教批判

定 平 元 四 良

—

わが国初期の社会主義運動および労働運動において、キリスト教徒が指導的役割を演じたことはよく知られているところである。わが国の初期社会主義運動には二つの流れが存在した。その一つは、自由民権運動の左派つまりフランス唯物論の流れをくむ一派と、他の一つは、アメリカ帰りのキリスト教徒の一派である。そして、最初にリーダーシップをとったのはキリスト教徒であったが、社会主義運動が研究の段階から実践の段階に入るにしたがって、そのリーダーシップが唯物論の流れをくむ一派にとってかわられたこともすでに明らかにされているところである。明治31年10月、キリスト教徒を中心として発足した社会主義研究会が、34年5月社会民主党を創立(即日禁止)し、次いで社会主義協会とその名称を変更したとき、その内実も変貌をきたしていたのである。即ち、「社会民主党の禁止せらるるや、予等は一時殆ど中絶したる社会主義研究会を再び継続し、学術団体として社会主義の弘通に力めんとせり。而して此時や、政府当局の物色稍厳なるに至ると同時に、社会主義研究会発起者の多数はいつか離れ去り、会の形式性質俱に全く一変せり。其中心は最早ユニテリアン会員の学者に非ずして、労働運動者及び新聞雑誌記者なりき。其名は社会主義研究会に非ずして社会主義協会となりき」¹⁾ということである。しかし、社会主義協会が片山潜と西川光二郎を中心として活動していたとすると、キリスト教徒のリーダーシップは未だ完全に失なわれていなかったとみてよい。政治的实践を禁止せられた社会主義者達は社会主義協会によって社会主義の伝道に専念していた。彼等が社会主義の

宣伝活動を《伝道旅行》とよんでいたところに宗教的キリスト教的情念をうかがいしることができる。次いで36年11月、幸徳伝次郎、堺利彦を中心として「平民社」を創立した。「平民社の創立せらるるや、天下の同情は一時に彼等二人に集まり、11月15日週刊『平民新聞』第1号を発行するや、社会は為に一大センセーションを惹起したり」²⁾という状態であった。この週刊『平民新聞』が『自由・平等・博愛』の三大要義を冒頭に掲げたところに、自由民権運動の思想的系譜を継承していることが認められる。また「国法の許す範囲」とか「絶対に暴力を非認する」と力説している点などに、ドイツ流の議会政策的社会民主主義の傾向と、人道主義的キリスト教的社会主義の影響もうかがわれるのである。この平民社に集まって来たものの大半はキリスト教徒であったといわれているが、幸徳、堺の両氏を擁うして発足したことから考えてみても、平民社内における唯物論的或は反キリスト教的勢力の増大は否定すべくもない。『平民新聞』の創刊一周年記念に刊行した絵葉書は、トルストイを除いては、いずれも反宗教的なマルクス、エンゲルス、ラッサール、ベーベル、クロポトキンであったことがその事実を象徴的に示している。

さて、平民社は峻厳な政府の取締りと、財政難と、社内におけるキリスト教的分子と反宗教的分子との反目等の理由から、38年10月には解散するのやむなきにいたったのである。かくして、「平民社」解散後、日本の社会主義運動はキリスト教派と反宗教派との二つの陣営に分かれるに至った。この頃から反宗教派の社会主義者達からのキリスト教批判は盛んとなってきた。従来、日本の初期社会主義運動におけるキリスト教徒の指導的役割については、上述の如くよく論ぜられている

のであるが、平民社解散後活発になったキリスト教批判の側面については余り論ぜられていないようである。そこで、キリスト教界の如何なる点が、如何なる理由で、反宗教的社會主義者および一部のキリスト教社會主義者によって批判されたかを述べようと思う。

二

キリスト教批判の第一は、教界が日露戦争を肯定して政府に協力した態度に対してである。そもそも、平民社は非戦論の立場を貫くために、「萬朝報」を退社した幸徳、堺らによって組織されたものであり、社會主義も実は彼等の非戦論を媒介として一般化されたのである。さらに、日清戦争の時には、それが義戦であることを唱道した内村鑑三も、日露戦争の時には徹底的反戦論の態度を示していた。政治活動を禁じられて手も足もでない社會主義者達にとって、非戦論こそが唯一の活動の場であったといえる。したがって社會主義者を峻烈に弾圧している政府に協力して、キリスト教界が戦争を是認する態度は許し難いことであったにちがいない。それでは、キリスト教界はどのように戦争に協力し、また何故に戦争を是認したのであるのか。

日露の開戦は37年3月10日であるが、日本基督教史をみると、それ以前に本多庸一は大山巖を訪問し、軍隊慰問の計画に就いて談じている。また『征露論』『征露と伝道』を著して日露戦争が日本の自衛と天職との為を避くべからざる所以を述べた。また、戦時におけるキリスト教徒の共同奉仕について、従軍布教師又は軍隊慰問使の派遣、将兵にたいする伝道、軍人用小冊子を印刷配布するなどを取り決めている。さらに注目すべきは「日露戦争は日清戦争と異なり、異色人種又異宗教民族の争闘と看做され、欧米にては黄禍又異宗の名の下に日本を指し、我国内でも人種や宗教の相違を挙げて、感情に馳せる者がいた。総理大臣桂太郎はこれを憂ひ、人種や宗教の相違から感情の衝突を来して、国策の遂行を妨げざらんことを求め、4月8日本多に向つて、此趣旨の伝達を求めた」³⁾ ことである。そこで、本多と井深梶之助は

キリスト教徒として欧州へ赴き、日本軍の義軍なる所以を大いに宣伝これつとめたのである。黄禍論は当時欧米に於て相当行なわれていたようである。国内においても、日露戦争が仏教とキリスト教の争ひであるなどという仏教徒もいたようである。

教界は戦争にたいし以上のような協力をしたのであるが、それは何故であろうか。このかんの事情を「日本の基督教」（日刊平民新聞第54号、40年3月31日）は次のごとく述べている。

日本に於けるキリスト教運動の歴史も、亦欧州に於ける初期の運動の歴史と同じく、悲壮な迫害の歴史であった。「アレは耶穌だ」という一語は、独り輕蔑を意味するのみでなく、実に憎惡を意味して居た。独り憎惡を意味するのみでなく、実に汚穢を意味して居た。彼等は日本国民の継子として扱われたのである。吾人は当時の諸名士先輩が、斯かる迫害の間に立つて、其の世界主義、博愛主義、自由主義の旗幟を押立て、天下を敵として健闘した意気精神を思う毎に、深く畏敬の念を禁ぜぬのである。然れども日本の如き忠君愛国の念の極めて熾んな国柄では、一たび非国民を以て目せられ乱臣賊子を以て目せられては、容易に頭を抬げる訳には行かぬ。是れは、キリスト教徒の大部分が久しく苦痛とする所であった。彼の明治20年井上伯の条約改正の失敗と共に欧化主義の大頓挫となり、保守的反動の潮流が、天下に漲り、23年の教育勅語の渙発となり、29年の井上哲次郎の宗教教育衝突論となり、日本の思想界、教育界は全く仁義忠孝説の占領するところとなるや、キリスト教は烈しき迫害を蒙つて、殆ど存在の余地なきかと思はれた。此間の苦き経験は彼等キリスト教の諸名士諸先輩をして、忌はしき乱臣賊子の冤名を免がれんが為めに常に其頭脳を絞らせた。彼等はキリスト教の信仰が決して国家君主の存在と衝突せざることを弁疏せんが為めに、筆を秃し舌を爛し、其の精力をつくしたのである。

爾後10星霜、其の間キリスト教は萎靡甚だ振はないまま、日露戦争開始の時となった。是れ日本の国家に取つて実に一大事の秋である。忠良なる臣民の『忠君愛国』てふ思想の勃発は其の絶頂に達すると同時に、非国民憎惡の叫び、乱臣賊子罵

言の聲は又も各所に聞こえ出した。而してキリスト教徒の世界主義は又もや此の形勢を見て取ったキリスト教の諸名士諸先輩は此の上迫害に抗して戦うだけの元気はなかった。彼等は逸早く其の世界主義を抑隠して、却って国家主義の先頭に進んだ。而して熾んに戦争を讃美し、非戦論を主張せる社会主義者を攻撃して、自家が非国民ならぬことを弁疏し、『国家』のために義勇奉公の誠を致すものなることを証明しようとした。恰も好し、日本国家は他の原因から彼等キリスト教を利用する必要を感じて来て政府は深くキリスト教徒の義勇奉公の誠を嘉納した。茲に当年の継母継子は殆ど情人の如く握手するに至ったのである。ここで他の原因とは、さきに述べた黄禍論のことをさしているのである。

ともかく、キリスト教界が戦争協力の態度を決定した客観的な状況は以上のようなものであった。このような客観的状況だけであるならば消極的な理由でしかない。積極的な戦争肯定をやった教役者はいなかったであろうか。いたのである。その代表選手が海老名弾正である。彼の戦争讃美の説教に対して教界の内外から批判が集中されたのである。社会主義者達のキリスト教批判は彼の説教に触発されたといつてよい。したがって、次に、海老名弾正の積極的な戦争是認の教説をみることにしよう。

彼は「予が戦争観の一斑」（六合雑誌 280 号 11～17 頁）において。若し戦争を行なわずに同じ目的が達し得られるならば、自分はいくまでも非戦論である。しかし百万手を尽しても公明正大の目的が達せられないときは、戦争もやむ得ない。自分は生命を尊重する、その生命は一個人のそれではなく国家のそれである。一個人の生命は国家の生命の一部分なるが故に価値があるのである。国家の生命を重んずるが故に自己の生命を犠牲にするのである。国家の生命とは主義主張である。それをまげてまで非戦主義である必要はない。戦争論の如きは決して千変一律のものではない。たとえ主戦論から戦端を開いても、不利なことが明らかになればすぐやめればよい。滅亡するまで戦わねばならぬという義理はない。臨機応変にやるべきである。という見解を示している。

さらに「聖書の戦争主義」と題して次の如く述べている。即ち、挙国一致して戦争に熱中している時に非戦論を主張するなどいうことは極めて奇異な現象である。然るに、この非戦論者の中に多くのキリスト教徒がいることは願ふ注目すべき事実である。したがって、キリスト教は果して非戦主義を教えるものであるか否かは大いに討究すべき問題である。まず、旧約聖書を繙くならば、之が明らかに戦争を是認するものであることを認めなければならないであろう。モーゼの五経を初めとして旧約聖書の歴史の大部分は戦争史であり、予言書も戦争を否認したところがなく、むしろ義戦を奨励しているし、詩篇には軍歌もある。そもそも旧約聖書はイスラエル民族の奉ずべき国家の経典である。イスラエル民族を教育し之を指導することが旧約聖書の目的である。「敢て問ふ干戈を取らず戦争に訴へずして能く一国を建つるを得たるか、単に仁義道德を唱ふるのみにして能く建国の大業を成就するを得る乎。曰く否々、是れ到底不可能事なり」⁴⁾したがってモーゼは兵力を以て国を建てんと志したのである。古往今来国家は戦はずして興ったことがなければ、戦争なくして生存し得る国民もない。民族にとっては戦争は興国のための必須の要件である。イスラエル民族は自衛のために戦ったばかりでなく、エジプトを出てアラビヤからパレスチナに進んだ時は、明らかに侵略的戦争の態度をとっている。即ち「旧約聖書は啻に自衛的戦争のみならず、更に進んで侵略戦争をも是認せるものなり。豈に啻に之を是認せりと云はんや。旧約聖書は実に之を奨励し勧告せしなりき。是れ歴史の明示せるところ、誰れか能く此事実を否定し得んや」⁵⁾しかしながら、旧約聖書はさらに弱小国の取るべき態度について教えている。干戈を以て敵対するの愚を覚ったならば、馬を頼まず、戦を頼まず、只だ活ける神をぞ頼む、ことである。これは予言者の一大発明である。兵力なきユダヤ国民は専らエホバに頼むほかなかった。干戈に訴える途なき国民は仰いで天に訴えるの外ない。イエス・キリストは実に斯様な状態の時に生れてきた。彼は政治的興国を断念し霊的王國を建設することにした。霊的王國の建設には干戈を必要としない。必要なのは愛と真理だけであ

る。したがって、神国建設は純然たる非戦主義によって成就されなければならない。霊的王国をつくるには干戈も必要なければ、領土も必要ない、それは天上天下致る処にあるからである。かの有形的地上の王国と神の国とは何等関係がない。だからといってキリストは国家や家庭を無視したわけではない。神の国はこれら一切を超越するとともに、また同時にこれら一切を包容するものである。神の国は凡ての物の上に在ると同時に凡てのものの中に存する。われわれは神の国の民たると国家の臣民たると其間になんの矛盾もない。国家の存在を軽視する者は未だ神の国の真意を知らないものといわなければならない。しかしてこの神聖なる国家、民族、家庭をつくり之を維持するためには、干戈は一日として欠くことはできない。「試みに見よ、かの戸締りと云ひ巡査と云ひ是皆な家庭の自衛に於て欠く可からざるの要件たることを。家庭猶然り。況んや国家に於てをや。国家は到底干戈なくして存在する能はず。故に国民としては、飽くまで剣をもって起たざるを得ず。是れキリストの明知せるところにして又戦争を禁ぜざりし所以也」。⁶⁾ キリスト教は絶対的に戦争を否認するような狭量なものではない。

つぎに新約聖書をみると、明瞭に戦争を否認している箇所を発見することはできないけれど、其精神よりして非戦のように思はれる。しかしキリストは一切の戦争を厳禁しているわけではない。それが証拠にヨハネの許には多くの兵士が来たり、イエスを慕って軍人の長も従っているし、使徒行伝をみると、軍人の信徒が幾多いる。これらをみても新約聖書が100パーセント非戦論でないことは明かである。

さらに、戦争が悲惨であるが故にのみ避くべきものであるならば、霊の王国建設は地上の国家建設よりももっと悲惨なものであり、キリストの十字架も否定されなければならないであろう。十字架は大いなる犠牲的精神の発露であり、戦争は崇高なる犠牲的精神をわれわれに教ゆるものである。戦時でなければ容易に発揮し難い殉教者の精神である。徒に戦争を厭う者は未だキリストの精神を十分理解したものとはいえない。「余輩は為に繰り返して言はん。キリストは断じて戦争を否

認せず。其の自ら刀を取らざりしは単に人情忍びざるものあるが為にあらずして、神国建設上拙劣の策なるを以てなり」⁷⁾

以上が「聖書の戦争主義」の概要である。聖句を引用して戦争を肯定したのは海老名だけではなく殆んどの牧師がそうだったのである。ただ海老名は「桂月に入学し弾正に卒業す」といわれた程角帽層に魅力的な存在であっただけに海老名が発行する雑誌「新人」と彼の「説教」の与える影響は大きかったのである。「聖書の戦争主義」は「新人」に掲載されたものである。また「戦争の美」と題する説教(37年8月)は、さきに述べた犠牲的精神を高唱したものである。以上のような戦争讃美に対する批判は教界の内外から起った。

白柳秀湖は「キリスト教と海老名君」と題して次の如くいっている。即ち「余は、幾度か聖書を読み、されど余は未だ曾て、聖書の中に、権威と兇暴とを讃美せるものあるを見ず、されど世には随分、曲説阿世の妖僧あり、余は昨春の雨露の風雲漸く急ならんとする時、人心の顛倒に乘じ、聖壇より叱呼して、路可伝に『財布あるものは』之をとれ、旅袋まるもの亦然り、之等を有ぬ者は衣服を売って刃を買ふ可し」と、又馬太伝に『地に泰平を出さんが為に我来れりと云ふ勿れ泰平を出さんが為にあらず刃を出さんが為に來れり』とある旨を以て、キリストも亦戦争を是認したりと論ずる牧師あるを見て教界の墮落に驚かざるを得ざりき……………」。

されど余が君に対する喝仰の念が、儀然驚異の情に、変じたる一事ありき、余は一日友を訪ふて其机上に一冊子を見たり、其表装の下部に大砲を描き、上部は散弾の爆発して猛鷲の粉碎されたる惨憺たる光景を写し、中央に大書して『人道』と題せり、余は始之時流に投ずる軍歌俗謡の類なるべしと思惟し、とって觀るに海老名弾正著と銘せり、あまりの事に茫然として云ふ所をららず、…

海老名君は余が期待したる如き宗教家に非ざりき。君は先づ堂々としてキリストが聖書に於て戦争を是認したる事を明言せり、君『聖書の戦争主義』と題して論ぜり、曰く『国家は到底干戈なくして存在すること能はず、故に国民としては、飽まで剣を持って起たざるを得ず、之キリストの明

知らせる所にして、又其戦争を禁ぜざりし所以也』と。されど余を以て聖書をみれば、キリストは絶対的に戦争を非認したるは勿論、何等の目的を以てするも権威強力を以て人を凌がんとするを断乎として兇暴と見做したり、……………

去年7月3日君は本郷教会に於て大勇弁を用い、『戦争美』と題して、キリストが断乎として排斥したりし兇暴の積極的弁護を試み、幾多本郷の才媛と秀才とを感泣せしめたり、されど君が所論は形式論理の上に於てすらも、既に支離滅裂の窮態に陥りたりし也」⁸⁾と。

また山口孤剣は「海老名弾正君足下、僕足下の前に大胆なる質問を提供せんとす、足下基督教の聖書を読みしことある乎、足下色然として答へて曰はん、我聖書を読みしこと幾千万回なるを知らずと、而も僕は足下が聖書を読みしことなきを疑はざるを得ず。何を以てかしと言ふ、之れ此の公開状ある所以也。足下が世界的宗教なるキリスト教を日本化せんとして、神道を研究し、古典を討究し、キリスト教のロゴスの顕現は日本魂なりと叫び、天国と高天原は同一なりと論じ、今更らしく本地垂迹説を持ち来りて瓦器息き説教に『神風連的キリスト教』の宣伝に日も足らざる尚ほ多少恕すべしとせむ、而も侵略を讃美し、戦争を謳歌しつつあるに至つては宥すべからず、足下なほクリスチャンとして上帝が大審問の法廷に立ち得る乎」⁹⁾と批判した。白柳と山口との批判は、海老名の考えはキリストの教え(新約)に反するということであるが、海老名は新約よりもむしろ旧約聖書を中心として主戦論を展開している。そしてそこには甚だしい論理の飛躍がみられる。地上の王国と神の国とを区別しながら、突如として両者が交又する。

キリスト教界の戦争是認ムードに対する批判は、白露開戦早々に「キリスト教と非戦論」¹⁰⁾と題して『六合雑誌』に掲載された。著者は、キリスト教は絶対的非戦主義でないと言説人々に対して、つぎの三つの問題提起をした。第一に、キリストの教訓中に戦争を是認するが如き語句あるのは如何に解釈すべきか。第二に、キリストの教訓は全体として戦争を是認するものと見るべきや否や。第三に、たとえキリストが戦争を是認せしが

如き形迹ありとするも、吾人はこれを以てキリスト教の本旨と認むべきや、ということである。これらの問題に対して著者はつぎのように答える。先づ第一に、キリストが戦争を非認している教訓は聖書中随処に見ることができるが、戦争を是認しているとみられる箇所は二三ヶ所にすぎない。そして、これらの箇所¹¹⁾は聖書の高等批評からキリストの言葉として信ずるに足らないものとされているし、また《刃》も文字通り理解されるべきものではない。第二に、以上のことから、字句の上より見てもキリストが戦争を是認したと殆んど考えることができないが、問題は一字一句を云々することではなく、四福音書中に充溢せる思想が果して戦争主義と相容るべきものであるか否かということである。四福音書を一貫せる思想は何かということである。それが平和的思想であるならば、二三ヶ処に《刃》なる文字を散見しても問題とするに足りない。自分はキリストは平和の化身と感ずる。聖書中の一字一句を楯にとって議論の根拠となすことは極めて危険なことである、と述べて戦争是認論者を戒めている。

また同じ『六合雑誌』に「社会主義者は何故に非戦論者なるか」¹²⁾というのがある。そこでは、社会主義者が戦争を否定するのは、世人が盗奪を罪惡視するのと同じことで、義侠なる盗賊を認めることができないと同様に正義なる戦争も認めることができない。国家に生存の権利があるように個人にも生存の権利がある。労働の意欲がありながら、社会が彼に職業を与えなければ、彼の生命に危害を加えるのと同じであるから、彼は正当防衛として他人の財産を盗んでも善い。戦争をもって正当防衛と認むる者は同時に彼の盗奪も認めねばならないだろう、と述べている。戦争＝資本主義の害悪(失業もその一つ)ということであろう。

思うに、社会主義者のキリスト教界の主戦論に対する攻撃は、当時一般の世人が画いていた社会主義——キリスト教——非戦論——露探——非国民という図式からキリスト教徒が脱落したこと、同志と考えていたキリスト教徒の変心にたいする怒りからであるといえるだろう。唯物論派の社会主義者にとって《怒り》の対象だったキリスト教は、キリスト教社会主義者にとっては《嘆き》の

対象であった。その《嘆き》は、次に引用する石川三四郎の「日本のキリスト教」によく示されている。

「日本のキリスト教も斯くして日露戦争以後全く帝国主義の讃美者となった、戦争の謳歌者となった、移民政策の主唱者となった。国家的宗教でふ烙印は明らかに其の面上に捺されたのである、是れキリスト教の為に果して賀すべきことであるか。……………」

成程日本のキリスト教は、今後は決して国家社会の迫害に逢ふことなく、寧ろ其の庇護承認の下に坦々たる大道を行くであろう。……………」

併し一個の宗教が国家の庇護に依って盛大となる時は、即ち其の腐敗の兆した時である。……………」

キリスト教が既に現時の国家と握手提携し、国家の奴隷利器となる以上は、又其の国家を組織し維持し支配して居る権力階級紳士閥の宗教となるのは当然である。……………」

故に吾人は躊躇なく断言する。日本のキリスト教は、少なくとも其の大部若くば主要なる部分は、世界的宗教ではなく国家の奴隷利器となった。平民的宗教でなくて紳士閥の玩弄装飾となった。歴史は繰返すと、欧米のキリスト教会の現状は、更に日本に再演せらるるに至った。……………」

是れキリスト教自身の為に賀すべきかも知れない、社会人類の為に果して賀すべきであろうか、敢て純潔なるキリスト教徒諸君の一考を促して置く」¹³⁾

三

キリスト教批判の第二は、教界の腐敗墮落振りである。批判されている腐敗墮落の内容を一言にして云えば、教界が《紳士閥》と結託したことである。これらの事実は、週間平民新聞、直言、新紀元、光、日刊平民新聞、火鞭などにしばしば記載されている。ここでは『光』に記載されている事例を紹介しよう。

『光』は平民社解散後、唯物論派によって発刊されたものである。それだけにキリスト教界に対する批判もきびしかった。その第19号(39. 8. 20)を《対教会号》として特輯している。まず、「催

眠術的基督教」は山口孤剣の筆になるもので、「弗箱乎、十字架乎」というサブタイトルをみてもわかるように、特定の教会と特定の実業家、貴族、軍人との結びつきを記し、牧師が貴族、富豪の奴隷となり労働者を顧みないことをするどく非難し、「言ふ莫れ、貴族はキリストを信じて過去の罪惡を改悔したりと、労働者を虐殺したることも、同胞を詐偽したることも貧家の女を強姦したることも、如何なる兇暴も、圧制も、残忍も、酷虐も、キリストを信ずるによりて純化されたりといふ乎、聖化されたりといふ乎、姦淫も、殺戮も、聖化されたりといふ乎、掠奪もキリスト教を信ずるに依りて一切マイナスとなるべくは、キリスト教とは一回の催眠術に病痾を医せんとする者也、浜口態蔵が呪文と何ぞ異らんや、去よ、催眠術的キリスト教！亡びよ阿片的キリスト教！『信ぜよさらば救はれん』といふ、社会を腐敗せしむる斯語の如きものあらんや、噫泡沫の如き黄金を慕ふて心靈の呵責を聞かざる僧侶をして、春の野火の枯草を焼き払ふが如く煙となって消え失せしめよ」と《紳士閥》と結託した教界を痛罵した。山口孤剣は元来熱烈なキリスト教信徒であった。それだけに批判に熱気を帯びている。

白柳秀湖は、日本におけるキリスト教の発達史に尤も悪むべき汚点を印したのは、日露戦争に際し、『黄禍論』による西欧人の反感に対する政策のため、キリスト教界の諸名士がお先に使はれ、その節操をじゅうりんされて愧じないことであり、そういう教界の風潮を代表するのが海老名と本多庸一であるという。そして、当時青山学院長であった本多が、学生の風紀取り締りには積極的な警察の干渉が必要であるといったことをきびしく非難した。

また、「軍人に媚ぶるキリスト教」では、植村正久が労働者を軽蔑し軍人に平身低頭しているさまをえがき、「富豪と結べるキリスト教」では、海老名弾正がライオン歯磨店に奉仕しているさまを、「貴族に跪けるキリスト教」では小崎弘道が日向輝武、桂太郎に跪くさまを述べている。その他多数の日本キリスト教史に名をとどめている牧師達が槍玉にあげられている。これらの非難は、誇張されてもいようし、誤解もあるが、いわれ

なき非難攻撃だとはいえないだろう。中傷というにはあまりに具体的¹⁴⁾である。

さて、教界が「軍に媚ぶる教会」「富豪と結ぶる教会」「貴族に跪ける教会」に何故なったか、ということは、さきの「日本のキリスト教」から推測されるわけであるが、加えて、当時のキリスト教徒の社会層を明らかにすることによって、一層よく理解されるであろう。明治期プロテスタントの社会層は、初期は下級士族階級であり、士族の崩壊につれて都市の富裕な商人層や農村層にかわつていった。それが日本資本主義の発展につれて、都市中産階級が信徒の社会層となった。これは教会の分布が都市中心であるのをみても明らかである。教会には高等教育をうけつつある多数の男女学生と中年以上のサラリーマンと良家の婦人とが集った。これら中産階級の社会的性格は明治も今も余り変らないであろう。中産階級は、既存の社会秩序の中にあつて、一応の安定と特権とを保持し得た。したがって、かれらは、政治的、社会的には保守的であるか、中立的無関心の態度をとる。このような信徒の社会的性格が、教会をして社会の動向に妥協せしめた一半の理由であろう。

註 1) 石川旭山編「日本社会主義史」(明治文化全集第六卷) 36, 4

2) 同 上

3) 比屋根安定著「日本基督教史」第五卷 193～203

4) 渡瀬常吉著「海老名弾正先生」277

5) 同 上 277

6) 同 上 280

7) 同 上 282

8) 火鞭(明治社会主義史料集(補遺) 8, 43, 44.

9) 同 上 45

10) 六合雑誌 第278号, 1～5頁, 37.2.15.

11) ルカ伝, 二二章三六節三八節

イエス言ひ給ふ『されど今は財布ある者は之を取

れ、囊ある者も然すべし。また剣なき者は衣を売り剣を買へ。』

弟子たち言ふ『主、見たまへ、茲に剣二振あり』イエス言ひたまふ『足れ』

マタイ伝, 十章三四節

われ地に平和を投ぜんために来れりと思ふな、平和にあらず、反つて剣を投ぜん為に来れり。

12) 六合雑誌, 第284号1～5頁 37.8.15.

13) 石川三四郎「日本のキリスト教」日刊平民新聞 55号 40.3.21.

14) 具体的なものを二、三書きとめよう。

●海老名弾正氏は其の教会の会員過半は男女学生なれば、多くの費用を負担すること能はず、教会費の全部と海老名氏の衣食の費はライオン歯磨小林富次郎氏の負担にて従つて海老名氏も小林氏に対して大きな顔も出来ず、小林氏がクリスマスの聖壇より歯磨の広告演説することすら咎めず、去る三日小林氏米国より帰朝するや、海老名氏は主の日とかいふ大切な日曜の説教を休業し、全会員を引率して新橋停車場に出迎え小林氏に最敬礼を行はれたり。

●小崎弘道は豊南坂教会の牧師なり、日向輝武氏最も多く教会費を支出するより小崎氏も日向氏の前に阿諛至らざるなく、日向氏が芸妓買ひやキリスト教徒としてあるまじき行動あるより、教会の青年が騒ぎ立つれば、小崎氏は青年は理屈ばかり云つて寄附金はちっともせぬとて教会の会議に列せしめず。

●自己の自転車に突き当たりしといふを以て、イキナリ此の野郎といひながら法被掛けの職人を殴打したる、腕力にかけては聖書の講義よりも人を驚ろかす植村正久は、泥酔せる軍人がわざと己の自転車に突当たりしても、彼は早速自転車を下りて失礼しましたと詫びて過ぎゆけりと、此の逸話はキリスト教界に知らざるものなく、正久は常に軍人は国家の干城也、尊敬すべし、労働者は無学無智也、賤しむべしといふ説教をなしつつあり。

●地方に於けるキリスト教会も資本家か地主かを教会の飯びつの神となしつつあり、譬へば幡州明石の組合教会が同地の富豪某氏の一顰一笑に依りて左右され、下関日本キリスト教会が同地の富豪富海某氏の前に之れ従ふが如し。

●田村直臣、原胤昭氏などは鉱毒問題の熱心な運動者なりしが、古川市兵衛氏、二氏の従事せる教会や学校に金三百円を寄附せしより二氏は直に運動を中止したり。以上、「光」3号, 19号より